

アコ^な料理人 が送る、 異世界のんびり生活。

～強面、筋骨隆々、非常に強い。

でもとっても優しい男が異世界でほのぼの暮らすお話～

著 かむら
絵 日下コウ





第1話 異世界に降り立つ

「……うーん、ここは?」

館野秀治(たてのひょうじ)が目を覚ますと、そこは木漏れ日(こもれび)が差し込む森の中だつた。

(おかしい。昨夜は普通に家で寝たはずなのだが……)

秀治はむくりと体を起こし、辺りを見渡す。

だが、景色に見覚えがあるはずもなく、自分の状況をいまいち掴むことができない。
とりあえず、自分の体を確認すると、格好は寝ていた時の長袖長ズボンのジャージ姿で、足は裸足(はだし)だつた。

(体は鍛えているから、裸足に関してはそこまで問題はないが……)

というのも、秀治の身長は190センチ近くあり、筋骨隆々(きんこりゆうりゅう)。

顔は彫りが深く超強面(こわもて)と、一見ボディガードや裏稼業(うらかぎょう)の人間にしか見えない風貌(ふうぼう)をしている。

だが、秀治の本業は街の大衆食堂で働く料理人である。

加えて、アマチュア界隈(かいわい)ではかなり有名な総合格闘家でもあるという、二足の草鞋(わらじ)を履いている

男だ。

料理人としての腕もさることながら、格闘技の方でも、大会タイトルをいくつも獲つたことがあるくらい実力者である。

そんな異色の経験なので、時折テレビや雑誌などの取材を受けたりしたこともあつた。本人は運動不足解消のつもりで取り組んでいるだけで、実はそこまで格闘技にモチベーションはないのだが。

(とりあえず、森を出るために少し歩いてみるか)

ここにいても埒^{らち}が明かないと思った秀治は、少し警戒しながら森を歩き始めた。

裸足なので、足元にも注意しつつ。

(それにしても、見たことない植物が多いな……ん?)

キヨロキヨロと辺りを見ながら森を進んでいると、何か爆発音のようなものがかすかに聞こえてきた。

これはもしや人がいるかもしれないと思い、秀治は少し早足で音がした方角へ向かっていく。すると、次第に爆発音の他にも色々な音が聞こえ始めた。

木々の隙間を抜けて開けた場所に出ると、そこでは剣を持った少年2人と杖を持った少女が、黒色の体毛をした狼^{おおかみ}5匹に囲まれていた。

「くそ、このままじゃ……」

3人のうち、赤髪で活発そうな顔立ちをしている少年が、焦り^{あせ}を滲ませた声を上げた。

「大丈夫ですか、君達っ!?

そんな少年達を見て、秀治は咄嗟^{とっさ}に彼らに向かつて叫んだ。

少年達は秀治の方へと顔を向ける。

「えっ、誰だおっさん!?」

赤髪の少年は狼の行動に警戒しつつ、秀治にそう尋ねた。

(お、おっさん……一応まだ26歳なのだが……)

「つて、おっさん丸腰じやねえか! 助けが来たもんかと……うわっ!」

しかし、そう口にした赤髪の少年は、その後に狼の体当たりをもろに食らい、地面に転がされてしまった。

さらに、赤髪の少年よりも少し背の高い茶髪の少年の元にも、狼が迫る。

「うわあっ!?

赤髪の少年が倒れてしまつたことで、その茶髪の少年は複数の狼に狙われてしまい、防戦一方になつてしまふ。

「リック様つ、カイン様つ!」

水色の髪の少女が、慌てて倒れた少年達の名前を叫んで、援護をしようと杖を構えた。

だがその瞬間、少女の死角から1匹の狼が飛びかかる。

「待てえつ!!」

それに対しても秀治は、横から全速力で駆け寄ると、思い切り踏み込んで体重を乗せた全力パンチを繰り出した。

「ギャインつつ!?

その一撃はグシャツと嫌な音を立てながら狼の骨や肉を碎き、狼の体を十数メートルほどふつ飛ばした。

「大丈夫ですか?」

秀治は助けた少女に声をかけた。

「は、はい……ありがとうございます!」

そこで倒れていた赤髪の少年が声を上げる。

「お、おっさんまだ来てるぞ!」

「むつ？ ぐつ！」

狼を1匹倒したのも束の間、秀治を脅威と捉えた狼達2匹が、秀治の両腕に噛み付いてきた。

その鋭い牙で噛みつかれたら、当然かなり痛い。

しかし、格闘家として数多の痛みに耐えてきた秀治は、噛み付いてきた狼を腕の力だけで持ち上げ、ブオーンと振り解いた。

そして、すかさず地面に落ちた2匹の狼の首根っこを掴み、まるでとても軽いものを投げるかのようにスピードで地面に叩きつけた。

何かが碎ける生々しい音が響き、2匹の狼はその動きを止めた。

「ギャインつ」

そんな秀治の強さに恐れをなしたのか、残りの狼は森の木々の隙間を通つて逃げていった。

「ふうう……」

秀治は溜め息を吐いた。

(野生の凶暴な生物相手だから、手加減なしでやらせてもらつたが、この子達を守れて良かつた)
「お、おっさんすげえ！ ブラックウルフを素手で倒しちまうなんて！」

「本当に助かつたあ……オイラ達だけじゃやられるところだつたよ」

赤髪と茶髪の少年達が、土埃を払つて立ち上がりながら秀治に賞賛と感謝の言葉を告げた。

「本当に凄かつたですっ！ ……あ、その腕……」

水色の髪の少女も同じように賞賛するが、途中で秀治の腕に付いた傷痕に気付き、心配そうに声を上げた。

「ん？ ああ、大丈夫だよ。僕、体は頑丈だから」

少女が気にしている秀治の腕は、狼に噛みつかれたことで血がタラタラと滴っていた。
(まあまあ痛いが耐えられないほどではない)

「私、治しますよ!」

少女の言葉に秀治は首を傾げる。

「え？ ああ、応急処置の道具でもあるんですかね？」

「じつとしててくださいね……ヒール！」

少女がそう言いながら秀治の傷口に杖をかざすと、秀治の腕が緑色の光に包まれ、みるみるうちに傷口が塞^{ふさ}がり、痛みも薄れていった。

「こ、これはっ……!?」

「反対側も治しちゃいますね」

その光景は、まさしく魔法そのもの。

秀治が驚いているうちに、反対の腕も完治して、治った腕を動かしてみても全く違和感などはなかった。

少女は嬉しそうに口を開く。

「よしつ、治りました」

「君、今のは魔法……ですかね？」

「え？ はい、回復魔法ですよ？」

「回復魔法……」

まさかのファンタジー要素に、秀治はかなり驚いていた。

それに、切羽詰まつていてあまり気になつていなかつたが、リックと呼ばれた少年の髪は鮮やかな赤色だし、傷を治してくれた少女の髪は綺麗な水色。

おおよそ日本では見たことない髪色だ。

(ここは……もしかして異世界なのか?)

近頃書店に行くと、異世界に転移するライトノベルが置いてあつて、そういうものが流行つているという知識は秀治にもあつたが、まさか自分が転移するなんて思つてもいなかつた。
(だが、そういう者には世界を救うみたいな使命があつたりするんじやないのか? ……ここで考えても分からぬか)

「あの、まだどこか痛みますか？」

考え方をしていて顔が険しくなつていた秀治に、少女が心配そうに声をかけた。

「あ、いや、大丈夫ですよ。凄い魔法ですね」

「まだまだ修業中ですから、あんまり深い傷とかは治せないんですけどね」

「ところで、おっさんはこんな所で何してるんだ? 裸足だし、見たこともない格好だし」

赤髪の少年が、秀治に至極真つ当な疑問をぶつけてきた。

「ああ～……」

その質問に秀治は少し考え込む。

(異世界から来たと素直に言つて良いんだろうか……? ……いや、今は申し訳ないが誤魔化すことにしよう)

そう考えて、秀治は口を開いた。

「それが……いつの間にかこの森で倒れていたんですよ」

「いつの間にか? うーん、転移門の事故とかでふつ飛ばされたとかかな?」

「それかもしません」

「転移門が何かは分からぬが、秀治はとりあえずその勘違いに乗つかつておくことにした。

「行く当てはあるのか？」

「うーん……見知らぬ土地ですから、全くありませんね」

「なら、俺達が拠点にしてる街に行こうぜ！ とりあえず、誰かに聞けば、おっさんの境遇も分か
るだろうし！」

「それはありがたいです。案内を頼めますか？」

「おう、任せとけ！」

こうして、秀治の異世界（？）生活が始まつた。

◇ ◇ ◇

「おお、ここが……」

「ここが、俺達が拠点にしている冒険者ギルドがある、ヤタサの街だぜ！」

少年達の案内でも森から1時間ほど歩いて辿り着いたのは、木材や石材で造られた西洋風の建物が
立ち並ぶ綺麗な街だった。

太陽の位置的に、現在は昼下がりといったところだろうか。通りには沢山たくさんの人が歩いている。

そんな人混みの中には、獣の耳や尻尾しっぽが生えた人や、背中から羽が生えた人なんかもいる。

秀治は倒した狼を担いで歩いているため、その中でも一際目立つていた。
通りを眺めて、秀治は改めてここが異世界なんだと実感する。

「すみません、通行料を払つてもらいまして」

通行料を肩代わりしてくれた赤髪の少年リックに、秀治はお礼を伝えた。

「気にすんなって！ それに、シュージが肩に担いでそれを売れば、十分お釣りが来る。その時
に返してくれればいいよ！」

「助かります」

この街に来る間、秀治は少年達とお互いについての情報交換を行つた。
この世界のこともそれとなく教えてもらったのだ。

その中でとりあえず分かつたのは、まず赤髪の少年がリック、茶髪の少年がカイン、水色髪の少
女がメイという名前であること、お金の価値が日本とほぼ同じなこと、時間や暦の進み方も日本と
ほぼ同じなことである。

ちなみに、秀治は「シュージ」と呼ばれることになつた。
リック達は冒険者と呼ばれる職業に就いていて、先程倒した狼のような魔物を討伐したりして、
生活しているそうだ。

魔物というのは、この世界では基本的に害獸とされている生き物で、使役しえきして働くこともあります
が、野生の魔物は基本的には討伐対象らしい。

そして、リック達はこの街にある冒險者ギルドに所属していく、今回は森にゴブリンという魔物を討伐しに来ていたそうだ。

しかし、なぜかあの場所にはいないはずの狼（名をブラックウルフと呼ぶらしい）に遭遇してしまい、ピンチに陥っていたところ、秀治——シュージが現れたというわけだつた。

「本当に、僕がこのブラックウルフの報酬をもらつて良いんですか？」

シュージの問いに、茶髪の少年、カインが答える。

「もちろん。オイラ達は何もやつてないし」

「私達はゴブリンの報酬もありますし、気になさらないで大丈夫ですよ」

メイもそんな風に言つてくれる。

ちなみに現在、シュージは肩にブラックウルフの死骸を3体分担いでいる。

ブラックウルフの素材は人気らしく、1匹約3万ゴールドで買い取つてくれるそうだ。

街にある大衆食堂で1食食べるのに1000ゴールドからないくらいらしいので、3万ゴールドは日本円で3万円ほどの価値だ。

「お、見えてきたぜ！　ここが俺達が所属してるギルド、蒼天の風だ！」

そう言つてリックが指をさした方向、街の入り口から15分ほど歩いた所にその建物はあつた。

「おお……大きな建物ですね」

建物は3階建てくらいの高さがあり、一般的な学校の校舎と同じくらいの大きさを誇つてゐる。表の看板には大きく「蒼天の風」と書いてあつた。

（ん？　そういうば、看板の文字は異世界のものなのに、普通に読めるな）

見たこともない文字のはずだが、まるで日本語であるかのように読むことができる。

（うーむ、異世界に来た特典のようなものなのだろうか……まあ、考えても分からんな）

「おーい、シュージ入んじゃないのか？」

看板を見て不思議そうな表情を浮かべるシュージに、リックがそう言つてきた。

「あ、すみません。今行きますね」

シュージはリックの声で我に返り、気を取り直して建物の中へと歩を進めた。中に入ると、少し進んだ所に受付があり、その手前には掲示板のようなものと、会議で使うような大きな丸机がいくつか置いてある。

今は受付の場所以外には誰もいない。

シュージはとりあえずリック達についていき、受付の場所まで来た。

「キリカ姉、ただいま！」

「あら、リック、カイン、メイ、おかえり。えつと、そちらの方は？」

リックがキリカと呼んだその女性は、恐らく20代前半くらいの若くて小柄な女性で、黒に近い青髪を頭の後ろで纏めていた。

「あ、どうも。館野秀治と申します。あ、秀治が名前です」

「シュージさん、初めまして。私はこのギルドで受付や事務をしているキリカと申します」

(この世界の人は、「シュウジ」より「シュージ」の方が発音しやすそうだな)

シュージがそんなことを考えていると、リックがまた口を開く。

「キリカ姉、色々あつたから聞いてくれよー」

それからリック達は、シュージとの出会いや、シュージがどのような境遇であるかをキリカに説明した。

「えっ、ブラックウルフと!？」

話を聞いていたキリカがそう驚くと、メイが説明を加える。

「私達、森の入り口にいたのに、奥地にいるはずのブラックウルフがいっぱい出てきまして……シュージ様に助けてもらえてなかつたら今頃……」

「それは災難だったわね……シュージさん、私達のギルドの新人達を助けていただき、ありがとうございました」

キリカはシュージにそう言つて深々と頭を下げた。

「ああ、いえいえ。成り行きでしたからお気になさらう」

「今回の件は異変として他のギルドなどにも伝えておきますね。それで、シュージさんはこれから

どうするんですか?」

キリカに問われ、シュージは素直に答える。

「それが、行く当てがなくて困っているんですねえ」

「なあ、シュージ! そんだけ強いなら、冒険者になれば良いんじゃない?」

リックがそう元気に提案してきた。

「冒険者ですか? ……うーん、ですが、僕はあまり戦うのが好きではないんですね……」

「えつ、あんなに強いのに?」

「もちろん、やむを得ない時や仕事の時は戦いますが、好き^こんで戦おうとは思えなくて……」

「他に何か特技とかはありますか?」

そんなキリカの質問に、シュージはとりあえず自分ができることを答える。

「そうですね……あ、一応料理や家事などは得意ですよ」

「そういうことなら、うちのギルドの用務員として働きませんか? 丁度、この前まで掃除などを受け持つてくれていた方が年齢を理由に退職されたので、新しい方を探していたんです」

「お、それはいいですね。ですが、この場で決めちゃつていいくんですか?」

「はい。人事に関しては一任されますから。私、人を見る目はあるんです」

「そうなんですね。ぜひお願いします」

シュージはキリカの提案に乗つかることにした。

(就職先がこんなに早く決まるとはな。リック達の話を聞くに、かなり良心的なギルドらしいから、大丈夫だろう)

「では、先代の用務員さんが残してくれた簡単なマニュアルがありますので、後でお渡ししておきます。今はとりあえず、そのブラックウルフをなんとかしましようか」

「……うん、リック達のゴブリン討伐の証明もできたから、依頼達成よ」

続けてキリカはリック達の方を向いて、そう口にした。

「よーし、じゃあ街に遊びに……」

「ダメですよ、リック様。この後は武器の手入れをして、食事の準備もするんですから」

リックがウキウキとした様子でそう言うが、メイがピシャリとそれはダメだと言い放つ。

「うえー……そうだった……でも、月末だから大した食材は残ってないぞー?」

「それでどうするのか考えるのもオイラ達の役目だよ」

カインの言葉を聞いたシュージは、気になつたことを質問する。

「食事はカイン達が作つてるんですね?」

「うん。冒険者になると野営もあるから、じすいができた方がいいって言われてる。だから、オイラ達見習いや、野営経験の少ない人が練習がてら作ることになつてるんだ」

「では、良ければ僕も食事の手伝いをしていいですか?」

「シュージさんは、本当に料理もできるんですね……」

キリカがそう呟く。

「そうですね。ある程度はできますよ」

「とても助かります。実を言うと私を始め、ギルドのメンバーに料理が凄く上手という人はいないので、ちゃんとした知識を教えていただけると助かります」

「分かりました。あ、もちろん、全部はやらず、練習になるようにはしますので」

「ふふ、シュージさんは気が回りますね。はい、それでお願いします」

異世界初日にして、シュージは就職先を確保したのであつた。



「蒼天の風」で世話になることになつたシュージは、夕食の準備まではまだ少し時間があるそうで、先にギルド内をキリカに案内してもらつていた。

ちなみに、靴は先程スニーカーのようなものを貸してもらつた。

もしもの時のための備品だそうで、使う人はあんまりいないから気にせず使っていいそ�だ。
流石にいつまでも裸足というわけにはいかないので、シュージはありがたく使わせてもらつて
いる。

「こちらが鍛冶場や解体場があるエリアです」

そんな中、キリカの案内でギルドの一階にあるかなり広いエリアにやってきた。

そこは色々な道具や大きな釜などが置いてあり、熱気に満ち溢れた場所だった。

そのエリアの一角に、小柄なキリカよりもさらに低い身長ながら、筋骨隆々としていて、立派な茶色の髭ひげをたくわえた逞たけましい男性がいた。

「ジンバさん、お疲れ様です」

「む？　おお、キリカか。どうした？」

「その男性はジンバという名前らしく、キリカに声をかけられると、座っていた椅子から立ち上

がつてこちらに体を向けてきた。

「魔物の解体を頼みたいのと、今日から新しい用務員さんが入ることになったので、紹介しに来ました」

「シユージと申します。よろしくお願ひします」

シユージはそう言つて、ぺこりと頭を下げて挨拶あいさつをした。

「そうか。僕はジンバという。このギルドの鍛冶場や解体場の責任者じや。それにしても、お主は戦闘員じやないのか？」

挨拶と共に、そんな至極真つ当な質問をジンバは投げかけてきた。

「そうですね、あんまり戦いは好きではなくて……」

「ふむ？　ガタイはいいのにの？　まあいい、その肩のやつはこつちに置いとけ」

「あ、はい」

言われた通りシユージは、ブラックウルフの死骸を指定された場所に降ろした。

「ほう、こいつは凄いの。ブラックウルフが殴り殺されておる。本当に戦闘員じやないのか、お主？」

「あはは……まあ、もし戦闘が必要ならば頑張ります」

苦笑いするシユージを見て、キリカが口を開く。

「大丈夫ですよ、シユージさん。もしかしたら非常時にはお願ひするかもしませんが、戦いを好まない人には、無理強じいはしませんから」

「そう言つてもらえると助かります」

「まあ、用務員が来てくれるのは助かる。前の爺じいさんが辞めてから掃除が面倒での」

ジンバのそんな言葉通り、鍛治場はテーブルや床に色々なものが転がっていて、掃除のしがいがありそうな状態になっていた。

「任せてください。体力と丁寧さには自信がありますので」

「頼もしいの。ブラックウルフの報酬は後で振り込んでぞ」

どうやらこのギルドでは、依頼や討伐報酬、そして給料は各自の口座に振り込んで管理するシステムらしい。

「あれ、そういえばミノリさんはいないんですか？」

キリカが知らない名前を出しながら、ジンバにそう尋ねた。

「ああ、あいつは欲しい鉱石があると言つて、ダンジョンに行つた。数日は帰つてこんな」

「そのミフリさんというのはどちら様でしよう?」

「ここの大工場を使うメンバーの1人じや。僕が武器、あやつが防具の製作を主に担当しとる」

「なるほど。そのうち、挨拶したいですね」

「となると、今日は見習い組の3人に、私とジンバさん、あと夜にはギルマスと数人が帰つてくるくらいですね」

キリカの呟きを聞いて、シュージは再び疑問を投げかける。

「このギルドには何人いるんですか?」

「20人いないくらいですよ。うちは少數精銳なんです」

「普通のギルドはもつと多いんですけど、そういう組織はかなりの人数がいるものだと思っていましたが、それでもないらしい。」

「そうですね。大きな所だと100人を超えたりもします。ギルドによって、どういう活動方針かはまちまちですね」

「なるほど」

「うちのギルドは割と自由な方針なので、各々がするべきことを自分達^{おのの}でする感じです。リック達見習いの3人には、他のメンバーが戦闘技術であつたり、座学だったりを教えていますね」

そんな風にギルドのことをしばらく教えてもらつていたが、ジンバもキリカもまだ少し仕事が残つていて、シュージは2人とは一旦別れ、食堂へと向かつた。

このギルドの食堂は、1階の大工場とは反対側の場所にある。部屋の中には、いくつかの大きなテーブルと椅子が並べられていた。

そして、併設されている厨房^{ちゆうばう}は風通しの良さそうな広いオープンキッチンになつていて、料理している様子を見られるカウンター席もあつた。

シュージが食堂のキッチンを覗いてみると、そこにはリック達が既にいた。

「おつ、シュージ!」

厨房に入ってきたシュージを見つけたリックが、声をかけてきた。

「お疲れ様です、3人とも。これから夕食の準備ですかね?」

「どうなんだけど……」

シュージの言葉を聞いたカインが、困った様子を見せる。

「どうしたんですか、カイン?」

「食材があんまりなくて……」

「これは、冷蔵庫ですかね？ 見てもいいですか？」

「あ、うん」

「ショージが厨房にあつたかなり大きな冷蔵庫を開けてみると、そこにはいくつかの食材が入っていた。」

「ふむ、僕が知ってる食材に似ているものが結構ありますね。こちらは何ですか？」

「それはポテート……ちゃんとした名前はツインポテートっていう野菜だよ」

カインが示したのは、2つの丸いじやがいもがくつ付いた、ツインポテートという野菜。これは余つてると言つていいぐらい、かなりの量が冷蔵庫の中に入っていた。

「この野菜は何でしょう？」

「それはキマグレタスだな」

続けてリックがショージに教えたのは、地球で言うところのレタスに似た野菜。

形はレタスではあつたが、冷蔵庫に入っているキマグレタスはサイズが大小バラバラだ。

ショージが理由を尋ねると、キマグレタスはどれくらいの大きさに成長するかは気まぐれという、その名に相応しい要素のある野菜だと判明した。

「ふむふむ、こちらのちょっとだけある加工肉っぽいものは？」

ショージの質問に、メイが答える。

「それはオーケ肉の塩漬けですね」

唯一残つていた肉は、オーケという魔物の肉だつた。

色や形は違うが、ショージは触つてみた感じ、扱い方は地球の豚肉と同じで大丈夫だと判断した。調味料に関しては、塩、胡椒、砂糖などの基本的なものから、牛乳、サラダ油、オリーブオイル、酒に酢といったものまで揃つっていた。

その他は、卵がそれなりの数あり、果物も少し余つている。

加えて、主食として食パンが大量に残つており、どうやらこれが今ある食材全てのようだつた。「やっぱり月末は食材が尽きるなあ……」

リックの呟きにメイが反応する。

「リック様がこの前、盛大にお肉とかを焼いちやうから……」

「だ、だつて美味そうだつたし……」

「ふむ、3人ならこの状況で何を作りますか？」

ショージの質問にメイが答える。

「うーん、しようがないからふかしポテートとかですかね……？ あとはサラダ……」

「塩漬け肉は使わないんですか？」

「これだけしかないと、全員にはちよつとしか行き渡りませんから、中途半端になつてしまい

ます」

「なるほどなるほど」

そう言いながら、シュージは考え込む。

(うーん、この世界ではあまり料理が発達していないのか？ リック達があんまり得意じゃない可能性もあるが)

「シュージ様だつたら何を作るんですか？」

メイにそう聞かれたシュージは、少し考える素振りを見せた後、3人に指示を出していく。

「そうですね……そうしたら、手順は僕が教えますから、色々と3人に作つてもらいましょう。まず、僕とカインはボテートの皮剥きを」

「うん、分かった」

「メイは食パンを指に乗るくらいの賽の目状に切り分けてください」

「はいっ」

「リックには少し力仕事をお願いしますね？」

「え、料理なのに力仕事？」

そう言つて不思議そうにするリックに、シュージは手頃なサイズのボウルに卵黄と酢と塩を入れて渡した。

「はい。ボウルに入れたこちらのものを、泡立て器で素早くかき混ぜてください」

「よく分かんないけど、分かつた！」

「液がもつたりとしてきたら教えてくださいね」

とりあえず、シュージが見習い組の3人にそれぞれやることを教え、作業に取り組んでもらう。
(夕食まではまだまだ時間はあるようだから、少し手間がかかつても大丈夫だろう)

カインとシュージは沢山のツインボテートの皮を剥く。

カインはピーラーを使ってるのに対し、シュージは包丁でくるくると凄い速さで剥いていく。

「わあ……シュージ凄いな……」

カインが驚きの声を上げる。

「はは、慣れですかね、この辺は」

料理人としての経験の違いだろう、とシュージは考えた。

「もしかして、シュージつて結構凄い料理人？」

「一応、お店で働いたりはしましたね」

シュージは日本にいた頃、食堂で出す料理はもちろん、家での食事もほとんど自分で作っていた。
格闘家という側面もあったので、体作りのために栄養バランスを考えてそうしていたのだ。

もつと色々作りたいし食べたい、と常日頃から考え、本やネットでレシピをよく眺めていた。
おかげで、料理の知識に關してはかなり豊富なのだ。

「シュージ様、これくらいでいいですか？」

今度はメイが、賽の目状に切つた食パンを見せながらそう言つてきた。

「はい、そのくらいあれば大丈夫です。そうしたら、切つた食パンにオリーブオイルを塗つて炒め

てもらえますか?」

「パンを炒めるんですか?」

「はい。お願ひします」

メイが作っているのはクルトンだ。

ただのサラダでも、クルトンが少し載つているだけで、かなりアクセントにはなる。

「うおお……腕が痛い……これくらいでいいのか、シユージ……」

苦しそうな声色でリックがそう聞いてきた。

「うん、いい感じですね。ありがとうございます。まだ混ぜる作業があるんですけど、いけますか?」

「うえつ!? んー、ちょっときついかも……」

無理をさせるのは本意ではないので、シユージはリックと作業を変わることにした。

「はは、全然いいですよ。そうしたら、僕と交代しましようか。ポテートも粗方剥き終わつたので、リックはポテートをフライパンでこまめに転がしながら柔らかくなるまで温めておいてください。カインは塩漬け肉をかなり小さめのサイズに切つて、別のフライパンでカリッとするまで焼いてください」

「はーい!」

「分かったよ」

シユージの指示にリックとカインが返事をした。

「シユージ様、私はこの後どうすればいいですか?」

「ああ、そうしたら……」

その後も見習い組の3人に手伝つてもらいつつ、シユージは夕飯を作つていくのであった。

第2話 料理を振る舞う

「なあ、ギルマスター?」

「何だ?」

「どつかで飯食つていかねー?」

日が沈んだ後、ヤタサの街の大通りを、3人の男女が歩いていた。

1人は若くて活発そうな顔立ちに、狼のような耳と尻尾を生やした獣人の男、ガル。

もう1人は勝気な表情で、狐のような耳と尻尾を生やした獣人の女、シャロ。

そして、その2人の前を歩くのは、綺麗な金髪を携え、腰に剣を差した男。

この男は、シユージが所属することになった冒險者ギルド、蒼天の風のギルドマスター、ジルバートだ。

今はガルがジルバートに夕食をどこかで食べよう、と提案しているところだった。

その提案に對して、ジルバートが口を開く。

「ギルドに戻ればあるだろう」

「いや、だつて今日月末だろ？ どうせろくなもんじやねえしさ」

「……まあ、そうかもしれないが、お前の責任でもあるだろう」

「そただけど……」

「そうよそうよ。どちらかと言えばあの子達に教える側なのに、何でアンタが悪いこと教えるのよ」

ガルを責めるように、シャロがそんなことを言う。

彼らは現在、自らの拠点であるギルド、蒼天の風への帰り道を歩いていた。

朝から、依頼を受けて魔物の討伐を行つており、当然かなり腹が減つている。

だが、先日ここにいるガルが見習いのリックをそそのかし、大量に肉などの食材を消費したのだ。そのため、ここ数日、ギルドの飯は中々質素なものとなつていて。

当然、リックとガルはきつい叱りを受けたが、なくなつた食材が返つてくることはない。

加えて、食材を新たに買つたりすることもしなかつた。

新たに買つたら、また同じようなことをしても、許されると思うかもしれない。ジルバートはそういう考え、ギルドの全員が不満を漏らすような食事にあえてさせてている。

それもあつてか、リックとガルは物凄く反省していた。

だが、それを決めた当人のジルバートにとつても、きついものはきつい。

今日はガルとシャロの指導が主だったので、ジルバートはそこまで運動をしたわけではないのだが、一日中立ちっぱなしでそこそこ疲れているのは事実だ。

こういう疲れている時こそ美味しいものを食べたいのだが、恐らく待つているのは、ふかしポテトと簡単なサラダとパンくらいだろう、とジルバードは考えた。

ジルバートでもそのだから、若くて食欲がある上に、今日一日戦い続けたガルとシャロはもつときつい。

そうこうしているうちに、3人はギルドに着いた。

「やつと着いたら……って、なんか騒がしくねえか？」

「そうね？ 食堂に集まつてるみたい」

耳のいいガルとシャロは、食堂に人が集まっていることに気が付いた。

ギルドに入り、3人はとりあえず荷物と武器などをエントランスの机に置いて、真っ直ぐ食堂に向かう。

そこには今日いるメンバーが勢揃いしていて、キッチンの方には3人にとっては見慣れないガタイのいい男、シユージが立っていた。

「あ、ギルマス。おかえりなさい」

ジルバートに気付いたキリカが声をかけた。

「ああ、今戻った。キリカ、これは何の騒ぎだ？ それと、あそこにいる男は？」

「あの人は今日、用務員として雇うことになったシュージさんです。騒いでたのは、シュージさんが作つたご飯が美味しかつたからですかね？」

「……戦闘員ではないのか？」

ジルバートから見ても、シュージは戦闘向きの体つきだった。

「戦える力はありますけど、本人はあまり戦いが好きじゃないそうですよ。まあ、そういうのは後にして、今はご飯を食べてみてくださいよ」

「……まあ、そうだな」

それからジルバート達が席に座ると、あれよあれよという間に見習い組達が料理を運んできた。

「おお！ なんか美味そう！」

「見た目は焼いたポテートと普通のサラダだけど、何でか美味しそうね」

料理を見たガルとシャロが、嬉しそうにそう言つた。

運ばれてきたのは、ツインポテートに刻まれた塩漬け肉が入つた一品と、キマグレタスの上に薄茶色の物体と白い液体がかかつてゐるサラダだった。

その料理を見て、ジルバートもガルもシャロもツインポテートの料理から手をつけた。

「ほう、これは……」

「お！ これ美味しいな！ ポテートなのに、肉食つてるみたいだ！」

「胡椒が丁度いい感じにピリッとして美味しい！」

すると、ジルバート、ガル、シャロから驚きや賞賛の声が上がつた。

ガルとシャロの言う通り、ツインポテートからはしつかりとした肉の風味が感じられ、味付けは塩胡椒だけのシンプルなものだつたが、かなり満足感のある一皿になつていた。

3人は続けて、サラダにも手をつけていく。

「ほう……これも美味しいな」

「生の野菜食うの苦手だけど、この液体のおかげでめっちゃ食える！」

「このサクサクしたのもいいわね。これだけでも食べられそう」

これまた、ジルバート、ガル、シャロから喜びの声が上がつた。

サラダにかかつてゐるシーザードレッシングは、自家製ながらかなり上手く出来てゐる。

ケルトンもオリーブオイルで焼き上げたものに塩が軽く振つてあるので、これだけでもお酒のつまみになりそうな感じに仕上がりつていた。

そんな美味しい料理は、腹が空いていたジルバート達の胃袋にあつという間に吸い込まれていつた。

しっかりと完食したジルバート達の所へ、シュージがのしのしと歩み寄つていく。

「お気に召しましたか？」

シユージの質問に、ジルバートが笑顔で答える。

「ああ、とても美味かった。シユージと言ったか？」

「はい、シユージと言います。えっと、貴方はギルドマスター様ですよね？」

「様など付けなくていい。俺はジルバートという。ギルマスかジルとでも呼んでくれればいい」

「では、ジルさんとお呼びしますね」

お世話になるギルドのマスターということで、シユージは少し緊張していたのだが、ジルバートは快く対話に応じてくれた。

「この料理はシユージが全部作ったのか？」

「いえ、僕は少し手伝ったのと、指示を出しただけです。ほんのリックとカインとメイが作ったと言つていいと思います」

「そうなのか？」

話を振られた見習い組のリック、カイン、メイは、ジルバートに元気良く答える。

「おう！ 頑張つて作つたぜ！」

「まあ、ほんのシユージの教えのおかげかな」

「シユージ様はとても優しく丁寧に教えてくださいました」

そんな見習い組の言葉にジルバートは頷くと、改めてシユージの方を向く。

「シユージ、これから用務員として働くそうだな」

「はい」

「キリカのお眼鏡に適ったのなら俺からは文句はない。むしろ、これだけ美味しい料理が作れるなら、こちらからお願ひしたいくらいだ」

ジルバート的にも、シユージの加入は問題がないようだった。

「そう言つてもらえると嬉しいです」

「恥ずかしいことに、しっかりと料理を作ることのできる者がいなくてな。用務員の仕事をこなしつつ、見習い組……何ならその他の希望する者にも料理を教えてやつてくれ」

「分かりました。精一杯努めさせていただきます」

「よろしく頼む」

それからジルバートとシユージはしっかりと握手を交わし、シユージは晴れて正式に蒼天の風の一員となつた。

◇ ◇ ◇

「ここがシユージさんのお部屋ですね」

「おお、広いし綺麗ですね」

食事を終えたシユージは、キリカにギルドの3階にあるギルドメンバーの居住スペースに案内されていた。

これからシュージが暮らすことになる部屋は、ちょっといいアパートといった印象だ。今はベッドとクローゼットくらいしかないが、色々とものを置けそうなスペースもある。

「新しい家具などは自己負担ですが、好きに置いたりもしていいですよ」

キリカはシュージにそう説明をした。

「何から何まであります？」

「いえいえ。皆さん、シュージさんのご飯をとても気に入つて、これからの食事が楽しみだつて言つてましたから、もっと待遇が良くてもいいぐらいですよ」

「十分過ぎますよ。行く当てもなかつた僕を拾つてくださつて、こちらこそ感謝しかありません。明日からのお仕事、頑張りますね」

「一緒に頑張りましょう！ 分からないことがあつたら遠慮なく聞いてください」

「分かりました、ありがとうございます」

「では、今日はお疲れ様でした。おやすみなさい」

「おやすみなさい、キリカさん」

シュージは案内をしてくれたキリカと別れる。

部屋にはシャワールームが備え付けられていたので、シュージはシャワーをパパッと浴びてベッドに寝転がつた。

ベッドは少し硬めだったが、硬めのベッドが好きなシュージからするととても快適だ。

大きな環境の変化によつて知らぬ間に疲労が溜まつっていたのか、シュージはすぐに眠くなつた。

(明日からも頑張ろう)

そう心の中で誓いつつ、眠気に素直に身を任せたシュージだった。



シュージが異世界に来て2日目。

早めに目が覚めたシュージは、体を起こし、顔を洗つて食堂へと向かつた。

基本的にこのギルドでは、朝ご飯は各自適当に食べている。

冒険者として依頼を受けると、早い時間に出発しなければいけなかつたりするため、一緒に食べようにも時間が合わないので。

だが、人間にとつて朝ご飯はとても大事だと思っているシュージは、できればちゃんとしたもの食べてもらいたいと考え、まだ誰もいない食堂で料理を始めた。

使うのは、昨日シザードレッシングのために作ったマヨネーズの余りと卵だ。

冷蔵庫にはもうほとんど食材がないので、あまり品目は増やせないが、せめてお腹に溜まるようにと、今回はたまごサンドを作ることにした。

食パンはありがたいことにかなり大量に残つていて。

(たまごサンドなら冷されててもそれはそれで美味しいので、食事を摂る時間に差があつても大丈夫だらう)

それからシュージは黙々と1人でゆで卵を作り、その間になくなりそうなマヨネーズを追加で作る。

ハンドミキサーのようなものがあれば楽なのだが、生憎ないので、しつかりと泡立て器で作つていく。

シュージのフィジカルがあれば、その作業はそこまで苦でもない。

そして、ゆで卵ができたらボウルに移して粗めに潰し、マヨネーズと軽く塩胡椒を加えて味を調える。あとはそれを食パンの上に載せて挟むだけで完成だ。

それから少しキッチン内を探して、シュージは赤色のジャムを見つけた。

意味見してみたところ苺のジャムだったの、シュージはジャムサンドも同じくらい作った。

たまごサンドにジャムサンド。

これぐらいあれば普通の人なら十分な量だろう。食欲のある者達は、どちらかを多めに食べたりすれば満足できるだろう。

作り終えたシュージがそんなことを考えていると、まだ少し眠そうなキリカが食堂に入ってきた。

「ふわあ……あら、シュージさん？」

「おはようございます、キリカさん。早いですね？」

「おはようございます。受付業務があるので、基本は私が一番ことが多いですね。何をしてるんですか？」

「皆さんの朝ご飯を作つてました」

「えつ、わざわざ作つてくれたんですね？」

キリカは驚きながらそう口にした。

「このギルドに用務員として雇われたなら、皆さんのサポートができるだけしたいと思いまして」

「そんな無理になくとも大丈夫ですよ……？」

「はは、無理なんとしてないですから大丈夫ですよ。元々早起きなタチですし、喜んでもらえるのは嬉しいですから」

「シュージさん……ふふ、ありがとうございます。絶対皆さん喜びますよ」

「それなら良かつたです。丁度できましたから、どうぞ」

早速シュージは、キリカにたまごサンドとジャムサンドを載せたお皿を手渡す。

「ありがとうございます。……んんっ！ これ、美味しいですっ！」

料理を受け取ったキリカは、まずたまごサンドを口に運んだ。

そして、一口食べてすぐに驚きの声を上げた。

「卵だと思いますけど、なんか不思議な風味がしますね？」

「マヨネーズの風味ですね。昨日のサラダにかかつっていたシーザードレッシングも、マヨネーズを



もとにして作つたんです」

「そう言われてみると味が少し似ていますね」

「この辺りでは作られていないんですかね?」

「そうですね、食べたことないです。これだけ美味しいなら、レシピ登録をしてもいいかもしませんね」

「レシピ登録ですか?」

シユージの質問にキリカが頷く。

「はい。新しくて美味しい料理とか調味料を作つた際は、商業ギルドに登録して、レシピとして販売するんです。そうすると、レシピの使用料が登録者に一部支払われます」

「なるほど、そういうものがあるんですね」

「とりあえず、このギルドの皆さんに食べてもらつて、誰も知らなかつたら登録していいと思いますよ。ジンバさんは遠い国から来ましたし、ギルドマスターも仕事柄、色々な場所に行つていて、食文化にもそこそこ詳しいですから」

「分かりました」

「と、難しい話はこのくらいにして、今はこの美味しい朝ご飯を堪能します!」

「はは、そうですね。遠慮なく召し上がつてください」

それからキリカを始め、後から来たメンバーにもたまごサンドは大好評だった。

誰もマヨネーズは知らなかつたため、近いうちにマヨネーズやたまごサンドを商業ギルドに登録しに行くことになった。

そして、ギルドメンバー全員が、この美味しい朝ご飯に感動したようで、負担じやなけばぜひまた作つてほしいという話になる。

シュージは全く負担とは思つておらず、自分の分を作るついでなので、その申し出を快く了承した。

◇ ◇ ◇

朝ご飯を食べ終え、まだギリギリ朝と呼べるくらいの時間に、シュージは見習い組の3人とヤタサの街の市場までやつてきていた。

この市場は、大通りの両側に様々な出店が並んでいる。

食材から装飾品まで、お店によつて様々なものが売られていて、見て回るのに相当時間がかかりそうな賑わいを見せていた。

「活気が凄いですね」

シュージの呟きにカインが応える。

「そうだね。店によつて値段や品質も変わるから、結構お買い物も大変だよ」

普段は見習い組が、金銭感覚や目利きの訓練を兼ねて、決められた金額でしつかりとした食材を買うように言われているそうだ。

1週間分の食材を一気に買い込むらしく、シュージ達に渡された金額も相当なものだった。体が資本の冒険者が多くいるため、食材はあればあるだけ消費されるそうだ。

ちなみに、大量の食材を買い込むにあたつて、シュージ達には収納袋というものも渡されていた。収納袋は入れたものを異空間へ転送し、量にして100キロくらいまで保管することができるらしい。

魔道具と呼ばれる優れ物だ。

ただ、当然便利なだけあつて貴重なもので、収納袋1つで50万ゴルドもするという。

中にはもつと開口部が大きいものや、内部の時間がゆっくり進むようになるなどグレードの高いものもあるらしいが、その辺りは莫大な値段になるので、買うとしても今使つてゐるサイズが一番良いらしい。

「お、ここが俺達がいつも買つてる肉屋だぜ！」

リックがシュージにそう声をかけた。

市場をキヨロキヨロと見渡しながら歩いているうちに、行きつけだという肉屋に到着したのだ。

「おう、坊主達じやねえか……つて、おおつ!? な、なんか厳しい兄ちゃんもいるな?」

肉屋にいた店主のおじさんは、シュージの厳つい風貌を見て驚きの声を上げた。

「あ、どうも。僕は蒼天の風で働くことになつたシユージと申します」

「中々すげえ体してゐなあ」

「はは、恐縮です」

「おつちやん、いつもと同じ感じの肉で頼む！」

「おう、分かつた」

氣を取り直して、リックが店主のおじさんにそう注文すると、店主のおじさんは色々な肉を準備し始めた。

「リック、何の肉を買うんですか？」

シユージがリックに質問をした。

「えつと、ビッグコッコとグレートバッファローにオーラーとか！」

「全部魔物の肉なんですか？」

「そうだぜ？ シユージは魔物の肉食わないのか？」

「そうですね……魔物を食べる習慣がない所から来まして」

シユージの言葉を聞いて、今度はメイが口を開く。

「魔物肉は安価で手に入るものも多く、焼いて食べるだけでも美味しいんですよ」

「そなんですね」

シユージがさらに話を聞くと、昨日使つた塩漬け肉も豚の魔物であるオーラーの肉から作られたも

のだつた。

(そう言われてみると確かに、何だか地球で売られていた塩漬け肉であるベーコンなどよりも、旨味^みが強かつた気がした)

そんな説明を受けつつ、シユージがお店の中を見渡していると、店の奥のバケツが目に入った。

「あ、店主さん。その奥のバケツに入つてるのつて……」

「ん？ ああ、肉を切り分けた時の骨だな。すまんな、見苦しくて」

店主が気まずそうに言つた。

「ああいえ。それも売り物だつたりしますか？」

「いや、こいつらは捨てるな。犬の餌^{えき}ぐらいにはなるかもしけんが」

「もし良ければ、譲つてもらうことつて可能ですかね？」

「これをか？ 全然いいぞ。処分する手間がかからないから、ありがたいぐらいだ」

「ありがとうございます」

ということで、シユージは沢山の肉と骨を手に入れた。

かなり鮮度も良く、種類にもばらつきがあるので、これらを使って色々と出汁^{だし}を取つてみようとシユージは考えていた。

やはり、美味しい食事に出汁は欠かせないので。

(それに、すじ肉もちゃんと料理すれば、美味しく食べられるものもあるだろう)

「シュージ様、それらは一体何に使うのですか？」

メイが、普通は捨ててしまう部位を手に入れて喜んでいるシュージを見て、不思議そうに尋ねた。

「出汁という調味料のようなものを作るのに使うのですが、知りませんか？」

「ダシ、ですか？ 聞いたことないですね」

「これが中々美味しいんですよ」

質問してきたメイを始め、リックやカインも出汁を知らない。

（この世界には出汁を取るという文化はないのだろうか）

そんなことを思いつつ、シュージは見習い組達に案内されながら市場を練り歩き、いつもお世話をなっているお店を教えてもらつたり、シュージが個人的に買いたいと思ったものも、自費でいくつか購入した。

先日倒したブラックウルフの報酬や、給料の半分が前払いで既に渡されており、懐にはそこそこ余裕があるのだ。

中でも掘り出し物だつたのは、市場のかなり端っこにあつた海産物や干物などを扱う出店で見つけた、乾燥させた海藻類や煮干しだ。

それに加え、海沿いの一部の地域で作られているらしい味噌みそと醤油しょうゆに魚醤ぎょじょうなんかもあつたので、シュージはかなりの量を購入した。

この辺りは内陸ということもあり、あまり海産物を食べる習慣がなくて売れなかつたらしく、値段もかなりお安くなつていた。

ただ、日本での価値を知つてゐるシュージからすると、申し訳なく感じるくらい安かつたので、ボテンシャルのある食材だとということをもつと広めてあげたいなどと考えていた。

レシピ登録という制度を利用して美味しさを広められれば、こんな市場の端っこで細々と商売をしなくて済むかもしれない。

店は週に1回この時間に出しているそのなので、今度この店の商品で作つた軽食でも差し入れてあげようと密かに思うシュージだつた。

そんなこんなで、有意義な買い物を終え、皆んなで仲良くギルドに帰るのであつた。

第3話 異世界食材

買い物から帰つたシュージは、キッチンで軽く仕込みをしつつ、ギルド内の掃除に取りかかることにした。

先程市場で手に入れたオーパークとビッグコッコ、グレートバッファローの3種類の骨に、お湯で軽く火を通したり、水で洗つたりしてから、それぞれ鍋なべに長ネギと生姜に似た野菜と共に放り込み、じっくり弱火で煮込んでいく。

20分おきくらいにアク取りをしつつ、空いた時間を掃除に充てる。

まずは、ロビーや受付周りを掃除することにして、先代の用務員さんが残してくれたメモを頼りに掃除用具などの準備をしていく。

ちなみに、服は用務員用の制服があつたので、シユージーはありがたくそれを着させてもらつている。

それは前世で清掃員が着ていたようなつなぎの制服で、しかも何着かもうえたので、掃除をする時と料理をする時に着替えれば衛生面もバツチリだろう。

ということでシユージーは、黙々と掃除を始めた。

バケツとモップを使って床の掃除をし、机などは綺麗な布巾、床や壁の落ちにくい汚れは雑巾でゴシゴシと擦つっていく。

こういう細々とした作業はシユージーの性分に合つていて、格闘技をやつている時なんかよりも心にゆとりを持つて取り組むことができていた。

「ただいま帰りましたわ」

すると、ロビー周りの掃除が一段落したタイミングで、女性の声が入り口の方から聞こえてきた。そちらに顔を向けると、そこには綺麗な金髪を縦ロールにし、吊り目で強気そうな、10代後半くらいの少女が立っていた。

「あら？ 見慣れない方がいるわね？」

そんな少女の問いに、シユージーは答える。

「あ、どうも。昨日から用務員として雇われました、シユージーと申します」

「へえ、昨日の今日で掃除なんて殊勝な心がけね。私はアンネリーゼよ。稀代の天才大魔法使いなんだから、敬いなさい？」

「お、アンちゃんお帰りなさい」

アンネリーゼとシユージーが話していると、受付の裏からキリカがひょこっと出てきた。すると、アンネリーゼが焦った様子を見せる。

「ちょっと、初対面の人がいるんだからちゃんとアンネリーゼと……！」

「はいはい、依頼は終わつた？ 1人だつたけど、ポカしてない？」

「ふふん、私にかかるべきよろいものですわ！」

「そつかそつか、偉いね！」

「ふわあ……って、頭なでなでするんじゃないわよ！」

「えー、嫌なの？」

「い、嫌とは言つてないですわつ。そんなに私のツヤツヤサラサラな髪を撫でたいなら、好きにすらといわわつ」

口調や雰囲気からして、ちょっと氣難しい子かなと若干思つたシユージーだったが、キリカとのやり取りを見ていると、何だか微笑ほほえましい気持ちになつた。

「全く……シユージーも、気軽に私をなでなでとかしちゃダメですわよ！」

アンメリーゼの言葉に、シュージは少し戸惑いながら答える。

「それはしませんが……」

「その大つきい手でなでなでとか、ダメですわよ！」

「は、はい？」

「そう言い残すと、アンメリーゼはギルドの階段を駆け上がつていった。

「えつと、どういうことなんでしょう？」

「ふふ、可愛いでしょう？ アンちゃんは褒められたがりなんです。今の言葉も、本心ではシュージさんの大つきな手でわしわし撫でて褒めてほいってことですよ」

アンメリーゼの気持ちをキリカがそう代弁する。

「な、なるほど？」

「アンちゃんはまだまだ若いのに、魔法使いとしての腕と才能は特別高いんです。このギルドでも一番と言つていいくらい。……でも、ちょっと過去に色々あって、素直に甘えられない難しい子なんですよ。だから、アンちゃんのことは存分に甘やかしてあげてください」

「ふむ……分かりました」

キリカの言葉にシュージは素直に頷いた。

「多分、泊まりがけでの依頼で疲れてると思いますから、まずは美味しい昼ご飯とかで労つてあげるといいかもしれませんねっ♪」

「はは、そういうことなら任せてください。沢山食材がありますから、昨日よりも手の込んだものを作れると思います」

「それは私も楽しみになっちゃいますね」

丁度掃除も一段落したということで、早速シュージは昼ご飯を作ることにした。



「あ、シュージ様。お昼ご飯の準備ですか？」

シュージが昼食を作ろうと厨房に向かうと、食堂にいたメイに声をかけられた。

「そうですね、今からしようかと」

「手伝いますよ」

「助かります。リックとカインはいないんですね？」

「2人は前衛職なので、ジル様に稽古を付けてもらっています。私は魔法の座学をしてました」

「皆さん頑張つて偉いですね」

シュージが褒めると、メイは嬉しそうな表情を浮かべる。

「えへへ……えつと、今日は何を作るんですか？」

「折角んな出汁が取れたので、今回は鶏ガラスープを使った料理を作ろうかと」

「鶏ガラスープ、ですか？ あ、この沢山の大鍋の中にある？」

立ち読みサンプル はここまで